

画用液の基本

画用液の種類と特長

画用液というとペンチングオイルがポピュラーです。それひとつあれば油絵が描けてしまうからです。でも、ペンチングオイルだけが画用液ではありません。丈夫で美しい油絵を仕上げるために、画家たちはさまざまな画用液を使いこなしてきました。まず、画用液の種類と役割、特色を紹介しましょう。

●**乾性油(固着剤)** リンシードオイルやポピーオイルが代表的な乾性油です。油絵具の顔料をキャンバスに定着させる糊の役割をします。大気中の酸素と反応して固化するため、体積が減らないのが特色です。難点は反応速度がきわめて遅いこと。油絵具の乾燥に時間がかかるのはそのためです。乾性油は油絵具に加えることで、固着力と艶、透明度を上げ、作品を丈夫なものにします。

●**揮発性油(溶剤)** 油絵具の薄め液で、ターペントイン(テレピン油)、ペトロールなどがあります。時間とともに空気中に揮散し、画面には残りません。油絵具だけでなく、他の画用液を薄めるのにも使います。

●**その他の助剤** 絵具に光沢を与えるワニス、油絵具の乾燥を促進させるシッカチーフなどがあります。

ペンチングオイルは乾性油、揮発性油、ワニス、乾燥促進剤をあらかじめ調合した画用液(調合溶き油)です。役割の異なる画用液を混合する手間が省け、平均的な性能を発揮します。さらに艶のある画面にしたり、さらさら油絵具を使いたいなど表現の幅を広げたい場合は、プロセスや技法にに応じてそれぞれの画用液を使い分けれます。

画用液の使い方

そのために知っておかなければならないのが、以下に述べる画

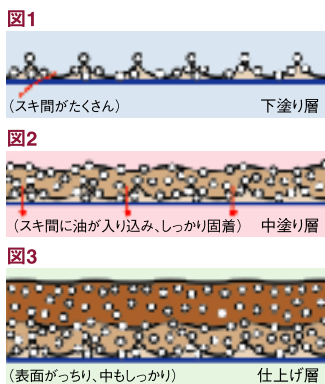
用液の基本的な使い方です。基本を無視すれば、後日絵具がはがれるなど事故にもつながりかねません。気をつけましょう。

●**下塗り(図1)** 最初はペトロールやターペントインなどの揮発性油だけで油絵具を溶いて、薄く色づけします。揮発性油は空气中に揮散し、乾くと何も残らない油なので画面はカサカサした感じになりますが、これですらに用いられる絵具を吸収する素地が整ったことになりました。

●**中塗り(図2)** 描き込みに従って、乾性油のリンシードオイルやポピーオイルなどを揮発性油に少しずつ混ぜてゆきます。最初乾性油を薄くするのは、下塗りできなかった隙間に油絵具を浸み込ませ、しっかりと固着させるためです。また、乾性油は乾いても体積がほとんど減らないので、中層にも顔料を定着させる理想的な糊剤の層ができたことになりました。

●**仕上げ(図3)** 乾性油の割合をさらに上げていきます。最後は乾性油の量を揮発性油よりも多くして仕上げると、艶と透明感のある堅牢な画面ができあがります。

丈夫で美しい油絵作品に仕上げるための原則は、『下塗りは糊分となる乾性油を少なく、描き進むに従って乾性油の量を増やす』こと。この基本さえしっかり守れば、途中でパンドルなど艶出しワニスを加えたり、ペンチングオイルをベースに各種画用液を混合するなど応用をきかせて、より幅広い表現にチャレンジすることができます。



ペンチング オイル

※参考文献:「絵具の科学」ホルベイン工業技術部編(中央公論美術出版)など



ホルベイン絵具

ホルベイン絵具に関する
ご質問・ご相談は…

ホルベイン絵具 技術サービスセンター TEL.0729 (85) 1223
〒579-8063 東大阪市横小路町4-10-52
電話受付時間/9:00~16:00 月~金曜日(祝日を除く)